

新生児傍尿道囊腫の1例

長崎大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 斉藤 泰教授)

津田 聡, 神田 滋, 古賀 成彦, 斉藤 泰

PARAURETHRAL CYST IN A FEMALE NEONATE: A CASE REPORT

Satoshi TSUDA, Shigeru KANDA, Shigehiko KOGA and Yutaka SAITO

From the Department of Urology, Nagasaki University School of Medicine

A seven-hour-old female neonate visited our hospital because of the anomaly of external urethral meatus. An interlabial cystic mass, the diameter of which was about 1 cm, was observed and an external urethral meatus could not be found. Direct needle aspiration of the cystic mass showed a small quantity of milky fluid and an urethral meatus was then identified.

(Acta Urol. Jpn. 44 : 891-892, 1998)

Key words: Paraurethral cyst, Neonate

緒 言

新生児の傍尿道囊腫は比較的稀な疾患で、外陰部腫瘍にて発見されることが多い。今回われわれは囊腫による圧排のため外尿道口を見いだせなかった傍尿道囊腫の1例を経験したので若干の考察を加え報告する。

症 例

患者: 出生後7時間, 女児

主訴: 陰唇間腫瘍

家族歴 既往歴: 特記事項なし

現病歴: 1997年9月19日, 在胎40週, 体重 2,654 g, Apgar score 10点にて出生。出生後6時間たっても排尿を認めず, 導尿を試みようとしたところ外尿道口を同定できないとのことで, 某産婦人科病院より当科緊急受診となった。

初診時: 陰前庭に小指頭大の腫瘍を認め, 外尿道口を見いだすことはできなかった (Fig. 1)。腫瘍は弾性

軟で, 囊腫状変化を思わせた。超音波にて腎臓に異常なく, 膀胱内には約 10 ml の尿貯留を認めた。腫瘍を穿刺してみると約 1 ml の白色乳汁様物を認めた。腫瘍が縮小すると囊腫外縁 1~2 時に外尿道口を見いだした。つまり, 囊腫は外尿道口の 7~8 時付近に存在した。8 Fr バルーンカテーテルを留置した。そのまま小児科へ入院し精査を行ったが, 血液検査や腎機能, 電解質など特に異常を認めず3日後退院した。その後再発は認めていない。なお内容液はすぐ凝固し, 精査不能であった。

考 察

女子の傍尿道囊腫は尿道腔中隔部を中心に尿道周囲に存在し尿道と交通のない囊腫である。女児の傍尿道囊腫は比較的稀な疾患であるといわれているが, Blaivas ら¹⁾は従来考えられたほど稀な疾患ではないと述べている。その成因については尿生殖洞, 中腎管, ミューラー管の遺残であると考えられているが, 議論が多い。

鑑別診断としては充実性と囊胞性のものが存在する。充実性腫瘍としては, 線維腫, 平滑筋腫, 神経芽種, 脂肪腫, 筋芽細胞腫などがあげられる。囊胞性のものとしては, 尿道憩室, 傍尿道膿瘍, 胎児性囊胞, 異所性尿管瘤がある¹⁾ また Nussbaum ら²⁾は陰唇間腫瘍として異所性尿管瘤脱出, 尿道脱, 傍尿道囊腫, 腔壁停滞囊胞, ぶどう状肉腫を挙げている。特に異所性尿管瘤とは鑑別が重要である。鑑別は穿刺により乳白色液を認めれば傍尿道囊腫と考えて良い³⁾とされている。女児傍尿道囊腫の報告は検索しうるかぎり自験例が本邦15例目であった⁴⁻⁷⁾ 年齢は新生児7例, 乳児2例, 8歳2例, 1歳, 3歳, 6歳, 10歳各1

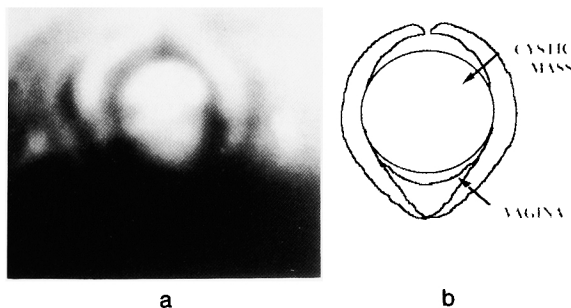


Fig 1. a: A picture showing the cystic mass in her interlabium. b: The schema of the picture.

例であった。症状は腫瘍が13例と最も多く、排尿困難、異常分泌物、が各1例であった。排尿障害のため緊急処置を必要とした症例は Wharton ら⁸⁾の報告のみであり、自験例のように囊腫にて外尿道口を見いだせなかったといった報告は認められなかった。新生児の最初の排尿は生後24時間以内が92%に認められるとされており⁹⁾。出生後6時間たっても排尿が見られなかった自験例では産科医が心配して導尿を試みたが、外尿道口を見出せず当院紹介となった。新生児における外陰部の腫瘍性病変において、傍尿道囊腫は鑑別診断として念頭におくべきであろう。治療は囊腫切除5例、開窓術5例、穿刺3例、自然破裂1例であった。診断としては川倉ら⁵⁾は憩室との鑑別のため尿道憩室造影、排尿時造影、内視鏡による下部尿道の精査が必要であると述べているが、Nussbaum ら²⁾は囊腫穿刺と少量の白色混濁液の確認で十分であると述べている。また治療に関しては囊腫切除、摘除を行っている症例が多いが、自然破裂も少なくない。小児の傍尿道囊腫は予後がよく、穿刺または切開のみで十分とする意見もある⁴⁾。自験例でも穿刺のみにて外尿道口を見出すことができ、乳白色の内容物を吸引できたことで診断も容易であった。その後再発も認めていない。再発時に切除を考慮し、初診時はまず穿刺にて診断を行い、経過をみてよいと思われる。

結 語

新生女児の傍尿道囊腫に対し、囊腫穿刺を施行し外尿道口を確認しえた1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

囊腫穿刺後の経過観察を行って下さった、長崎大学医学部小児科学教室木下英一博士に深謝致します。

文 献

- 1) Blaivas JG, Pais VM and Retik AB: Paraurethral cysts in female neonate. *Urology* **7**: 504-507, 1976
- 2) Nussbaum AR and Lebowitz RL: Interlabial masses in little girls: review and imaging recommendations. *Am J Roentgen* **141**: 65-71, 1983
- 3) Merguerian PA and McLorie GA: Disorders of the Female genitalia. In: *Clinical Pediatric Urology*. Edit by Kelalis PP, King LR and Belman AB. 3rd ed., pp. 1084-1105, W.B. Saunders, Philadelphia, 1992
- 4) 白井千博, 田近栄司: 女児傍尿道囊腫の1例. *泌尿紀要* **26**: 1139-1141, 1980
- 5) 川倉宏一, 有門克久, 森田 肇, ほか: 女児傍尿道囊腫の2例. *臨泌* **38**: 1005-1007, 1984
- 6) 森 達也, 有門克久, 川倉宏一, ほか: 女児傍尿道囊腫の1例(症例追加). *日泌尿会誌* **76**: 770, 1985
- 7) 玉田博志, 金井秀明, 佐久間芳文, ほか: 女子傍尿道囊腫の1例. *泌尿器外科* **10**: 1289-1292, 1997
- 8) Wharton LR and Kearns W: Diverticula of the female urethra. *J Urol* **63**: 1063-1076, 1950
- 9) Pierre R: Le rein de nouveau-ne. In: *Nephrologie Pédiatrique*. Edit by Pierre R. 1st ed., pp123, Flammarion Medecine-sciences, Paris, 1979

(Received on March 11, 1998)

(Accepted on August 4, 1998)